

中学校・高等学校音楽科における 聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究（2）

— 音楽を感受する能力測定方法の検討 —

光田龍太郎 伊藤 真 三村 真弓 泉谷 正則
桑田 一也 原 寛暁 増井知世子 松前 良昌
藤井 恵子

1. はじめに

平成20年度の学習指導要領改訂に伴い、音楽科では「根拠をもって自分なりに批評することのできるような力を育成する」ことが求められ、鑑賞領域において「言葉で説明する」「根拠をもって批評する」ことがめざされることになった。そのためには、根拠のもととなる音楽的知識が必要となる。これに加えて、音楽を聴き取る力も必要である。音楽が発するメッセージを理解したり、感じ取ったりするには、それらを受け取るだけの聴覚力が重要なのである。この能力が知覚する能力と感受する能力である。これがなければ、鑑賞・聴取・分析・批評・評価はできない。

本研究者たちは、中学校・高等学校音楽科における鑑賞能力育成プログラム開発のための基礎的研究として、生徒の知覚・感受の能力の発達の諸相を明らかにしようと、研究を続けてきた。一昨年度は、3附属中学校の生徒の批評能力・鑑賞能力に着目し、生徒が表現や鑑賞の授業において、聴取した音楽表現や楽曲に対して、どのような言葉で評価するのかを明らかにすることを目的とした研究を行った¹⁾。その結果、豊富で質の良い音楽的経験によって生徒の批評能力が向上することがわかり、また鑑賞ポイントをしっかり把握させることによって生徒の鑑賞能力が向上することもわかった。しかし同時に鋭い聴取力を育成することの必要性も明らかになった。昨年度は、4附属中学校の1年生を対象として、聴取力を中心とした音楽科学力調査を行い、小学校修了程度の内容をどの程度獲得しているのかを明らかにした²⁾。その結果、拍子を聴き分ける力、聴取した音と楽譜を照合する力はかなり育っていることがわかった。それらに比べて、長調・

短調を聴き分ける力は、やや成績が低かった。また楽器の音色を聴き分ける力は、楽器によって正答率にかなり差があることがわかった。この研究では、生徒の聴取力がある程度明らかにすることはできたが、この聴取力が音楽を聴く際の批評能力・鑑賞能力と実際に関連しているのかどうかは現段階ではわからない。

批評能力・鑑賞能力は、聴取力のように客観的数値として測ることが困難な能力である。一昨年度の研究においても、個々人の記述を詳細に検討すると、文章力の有無によって、音楽を感受していてもそれを適切に言語で表現することが難しい生徒がいることがわかり、批評能力・鑑賞能力そのものを正當に評価できていないことが課題として残った。このことから、批評能力・鑑賞能力の調査の前提として、音楽を感受する能力を測ることが必要であることが明らかとなった。

そこで今年度は、音楽を感受する能力をどのようにして測るかに着目する。本研究では、先行研究の調査方法を参考として、音楽を感受する能力を試行的に調査する。音楽的内容の異なる楽曲を聴いて、生徒がどのような印象を感受するのか、またそれには音楽的経験の有無がどう影響するのかを明らかにし、それらの結果から測定方法の妥当性を検討することを研究目的とする。

(三村 真弓)

2. 先行研究の検討

音楽を聴いて、そこからどのような感情を覚えるのか、つまり感受した内容を知るためには、自由記述が望ましいと考えるが、先述したように文章力の有無がかかわってくるので、本研究では形容詞に着目する。

音楽に対する感情反応の測定を、形容詞を用いて行った先行研究は、1930年代から存在する³⁾。近年では、あてはまる形容詞を選択するのではなく、尺度上で評定する方法が多く用いられている。これには、SD法 (Semantic Differential Method) と単極評定尺度の2つの方法がある。前者は、対となる評価語 (形容詞) を両極にとり、2つの評価語のどちらがよりあてはまるかを5段階および7段階の尺度で評定するものである。後者は、1つの評価語について5段階の尺度で評価する方法である。音楽の印象評価に関する前者の主な先行研究としては、安達・岩宮 (2003)⁴⁾、亀井・青山・木下・クーパー・星野 (2006)⁵⁾ 等があり、後者の主な先行研究としては、谷口 (1998)⁶⁾、中井・三石 (2004)⁷⁾ 等がある。

先行研究の結果から、楽曲の印象評価として形容詞等の評価語を用いた分析を行うことが有用であることが示唆されている。これらの先行研究を踏まえて、以下のような評価尺度を作成し、調査を試行した。

(三村 真弓)

3. 調査の内容

(1) 評価尺度と調査用紙の構成

谷口 (1998) によれば、SD法では評価語の対極性を保証する必要があるが、1つの尺度において2つの評価語を理解する必要があるなど、尺度構成上の困難および被験者への負担が大きい⁸⁾。本調査の被験者である中学生の特性を考慮すると、尺度の理解のしやすさと回答のしやすさが求められる。したがって、本調査では14の評価語を用いた5段階の単極評定法を用いることとした。

評価尺度作成の際には、井上・小林 (1985)⁹⁾ を基礎として芸術領域で有効な尺度を抽出し、さらに一般的な尺度を含めて決定した。また、中井・三石 (2004)¹⁰⁾ の単極5段階評定法を援用し、新たな評価尺度を作成した。使用した14の評価語は表1のとおりである。

表1 14の評価語

明るい	暗い
やわらかい	かたい
静かな	うるさい
軽快な	重々しい
生き生きとした	落ち着いた
はげしい	おだやかな
楽しい	悲しい
派手な	地味な

これらをランダムに配置し、各評価語の右に「そう思う(5)」~「そう思わない(1)」の評定尺度を配置し

た。また、楽曲を聴いて感じたことやイメージしたことを自由に記入する欄を設けた。さらに、曲を知っているかどうかを問う選択肢 (1. 聴いたことがあり、曲名も知っている, 2. 曲名は知らないが、聴いたことがある, 3. どこかで聴いたことがある, 4. 聴いたことがない) を示した。また、これまでの音楽の習い事の経験を問う設問を設けた。

(2) 楽曲の選定と調査方法

被験者が日常的に聴かないと思われる近現代の作曲家の作品を中心に5曲を決定した (表2)。長調の曲から2曲 (おだやかな印象のものとりズミカルなもの)、短調の曲から2曲 (ゆったりしたものと激しい印象のもの)、および調の特定が困難なものから1曲選曲した。各楽曲はコンピュータに取り込み、1分程度に抜粋し、楽曲の始めと終わりにフェードイン/フェードアウトの効果をかけたものをCDにコピーした。通常の音楽の授業と同様に、音楽室で一斉に鑑賞し、1つの楽曲を聴くたびに調査用紙に記入させた (聴取は1回のみ)。

表2 使用した楽曲と時間

	曲名	CD番号	時間
1曲目	ピアノ協奏曲第2番第2楽章 (ショスタコーヴィチ)	EMI Records TOCE-56221	1:06~ 2:14
2曲目	交響曲第5番第4楽章 (ショスタコーヴィチ)	Deutsch Grammophon UCCG-3385/6	0:00~ 1:14
3曲目	シンフォニエッタ (ヤナーチェク)	EMI Records TOCE-56222	0:00~ 1:11
4曲目	映画「シンドラーのリスト」メインテーマ (J. ヴィリアムズ)	EMI Records TOCE-56224	0:00~ 1:11
5曲目	「ロデオ」よりホーダウン (コーブランド)	EMI Records TOCE-56224	0:00~ 1:07

(3) 調査時期と対象

本調査は、A中学校第1学年120名を対象として、2012年1月に実施した。質問に回答していない箇所があった32名のデータを分析対象から除外し、計88名のデータを分析対象とした。そのうち、音楽の習い事の経験のある者 (音楽経験あり群) は58名、経験のない者 (音楽経験なし群) は30名であった。

(伊藤 真, 光田龍太郎)

4. 結果と考察

(1) 印象評価の全体の結果

まず、調査に使用した楽曲を知っているか否かについて、ほぼすべての被験者がすべての楽曲をほとんど知らないことが確認された (1曲目3.72 / 2曲目3.49 / 3曲目3.83 / 4曲目3.64 / 5曲目3.64)。印象評価結果の全体の平均値を示したものが図1~図5である。

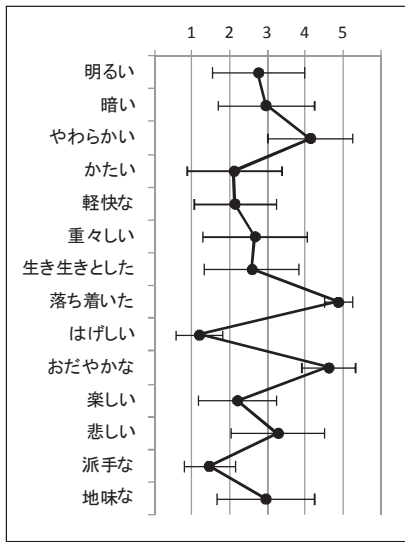


図1 1曲目の平均得点

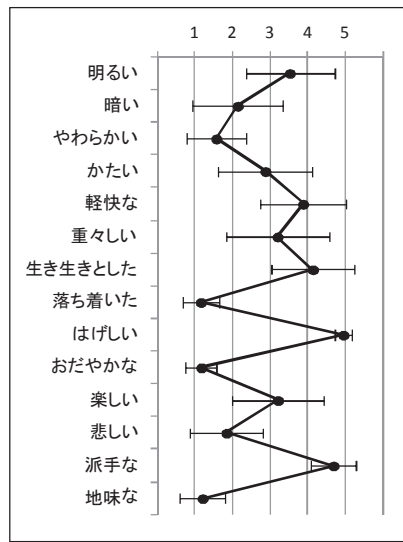


図2 2曲目の平均得点

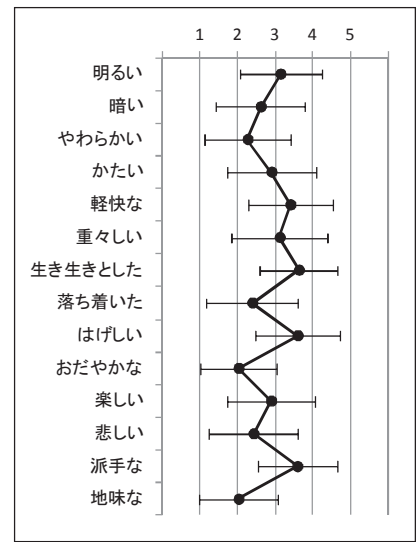


図3 3曲目の平均得点

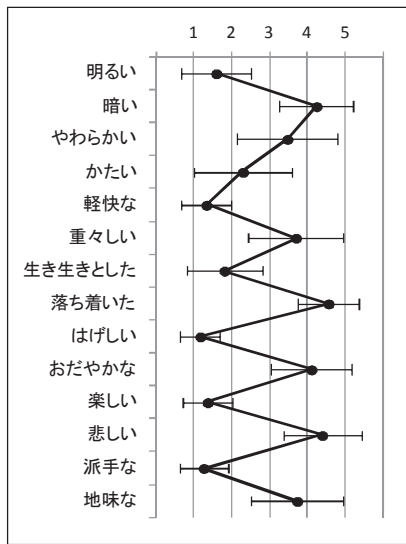


図4 4曲目の平均得点

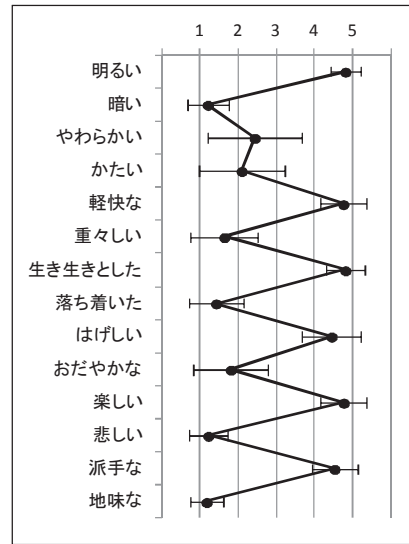


図5 5曲目の平均得点

誤差線は標準偏差を示す。

1曲目は、「やわらかい」(4.13 [SD: 1.11]), 「落ち着いた」(4.86 [SD: 0.62]), 「おだやかな」(4.61 [SD: 0.70]) の評価語の得点が4点以上で高かった。一方、「はげしい」(1.18 [SD: 0.62]), 「派手な」(1.44 [SD: 0.68]) の評価語の得点は2点以下で低かった。

2曲目は、「生き生きとした」(4.14 [SD: 1.11]), 「はげしい」(4.94 [SD: 0.23]), 「派手な」(4.68 [SD: 0.62]) の評価語の得点が4点以上で高かった。一方、「落ち着いた」(1.16 [SD: 0.48]), 「おだやかな」(1.17 [SD: 0.41]), 「悲しい」(1.84 [SD: 0.97]), 「地味な」(1.20 [SD: 0.61]) の評価語の得点は2点以下で低かった。

3曲目は、4点以上の明確に高い点および2点以下の明確に低い点がなかった。いずれの評価語も2~4点の間に収束しており、「明確に断言できないがどち

らかといえば〇〇」といった決め手に欠ける評価をしていた。その中では、「生き生きとした」(3.63 [SD: 1.03]), 「はげしい」(3.59 [SD: 1.11]), 「派手な」(3.58 [SD: 1.05]) の評価語の得点が比較的高い。一方「やわらかい」(2.26 [SD: 1.15]), 「おだやかな」(2.02 [SD: 1.02]), 「地味な」(2.02 [SD: 1.04]) の評価語の得点が比較的低かった。

4曲目は、「暗い」(4.24 [SD: 0.97]), 「落ち着いた」(4.56 [SD: 0.80]), 「悲しい」(4.39 [SD: 1.03]) の評価語の得点が4点以上で高かった。一方、「軽快な」(1.33 [SD: 0.66]), 「生き生きとした」(1.81 [SD: 1.00]), 「はげしい」(1.17 [SD: 0.53]), 「楽しい」(1.36 [SD: 0.66]), 「派手な」(1.26 [SD: 0.63]) の評価語の得点が2点以下で低かった。

5曲目は、「明るい」(4.81 [SD: 0.40]), 「軽快な」(4.75

[SD: 0.59]), 「生き生きとした」(4.81 [SD: 0.50]), 「はげしい」(4.44 [SD: 0.77]), 「楽しい」(4.76 [SD: 0.59]), 「派手な」(4.52 [SD: 0.61]) の評価語の得点が4点以上で高かった。一方, 「暗い」(1.20 [SD: 0.55]), 「重々しい」(1.64 [SD: 0.87]), 「落ち着いた」(1.42 [SD: 0.71]), 「おだやかな」(1.81 [SD: 0.97]), 「悲しい」(1.22 [SD: 0.51]), 「地味な」(1.17 [SD: 0.43]) の評価語の得点が2点以下で低かった。「やわらかい」「かたい」以外のすべての評価語においてポジティブな印象とネガティブな印象の得点が明確に分かれる結果であった。

このように, 被験者は14の評価語を含む単極評定法を用いて, 大きな矛盾なく音楽の印象を評価しているといえる。

(2) 音楽経験有無別の印象評価の結果

音楽経験あり群と音楽経験なし群の印象評価結果を楽曲ごとにまとめたものが図6～図10である。

両群間に極端な違いはみられないものの, 2曲目の「明るい」において音楽経験なし群の方がより明るいと感じている。それに関連して「暗い」では音楽経験なし群の方があまり暗いとは思わないと評価している。音楽経験なし群は, ショスタコーヴィチ作曲の交響曲第5番第4楽章から感じ取られるエネルギッシュな雰囲気や「明るい」と評価する傾向にあるといえる。

3曲目では音楽経験あり群の方がグラフの左右の振れ幅が大きく, 印象評価が明確である。ヤナーチェク作曲のシンフォニエッタは同じリズムと旋律が繰り返し奏され, 調が頻繁に変化する曲であるため, 音楽経験の多い生徒ほど音楽の諸要素を把握しやすく, より

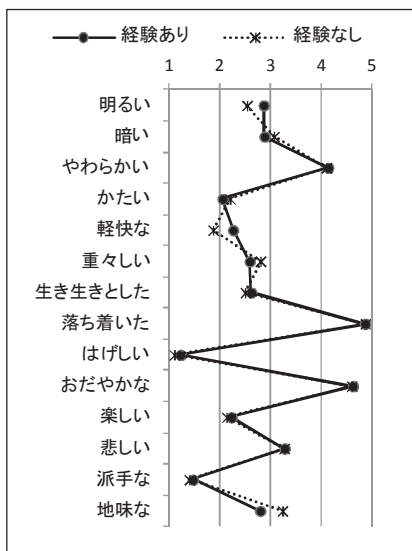


図6 1曲目の音楽経験別平均得点

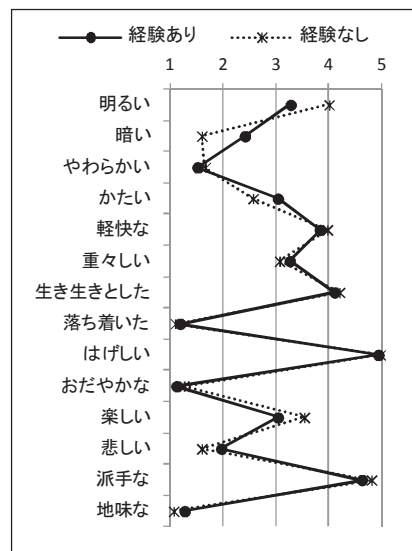


図7 2曲目の音楽経験別平均得点

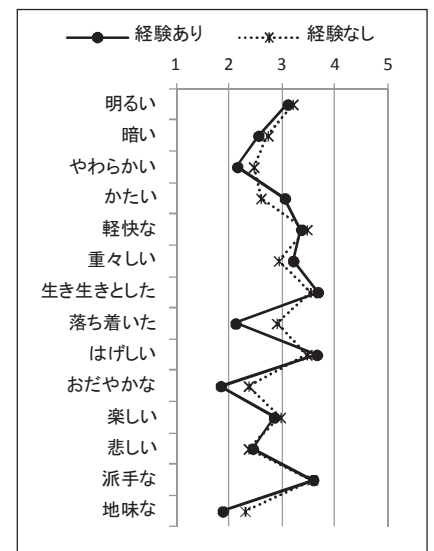


図8 3曲目の音楽経験別平均得点

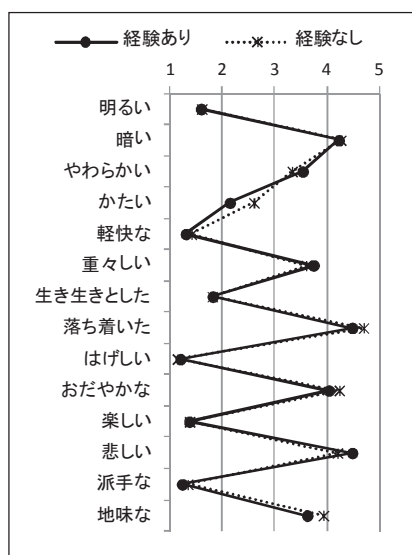


図9 4曲目の音楽経験別平均得点

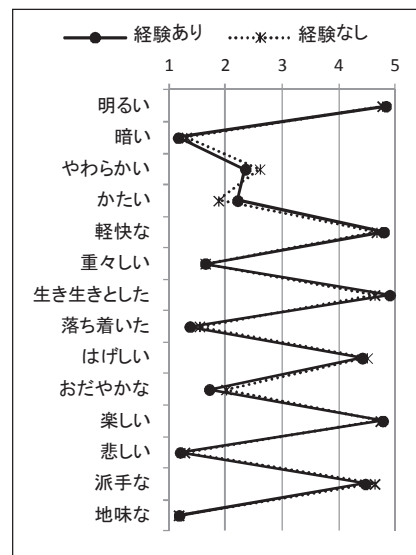


図10 5曲目の音楽経験別平均得点

明確に印象を評価することができると考えられる。

全5曲の各評価語について、音楽経験あり群と音楽経験なし群との間で平均値に差がみられるかどうか t 検定を行った結果、2曲目の「明るい」($t(86) = 2.83, p < .05$)と「暗い」($t(86) = 3.21, p < .05$)、3曲目の「落ち着いた」($t(86) = 2.97, p < .05$)と「おだやかな」($t(86) = 2.34, p < .05$)、5曲目の「生き生きとした」($t(86) = 2.41, p < .05$)の各評価語に関して有意な差がみられた。このことから、音楽経験あり群の方が音楽経験なし群よりも比較的明確に印象を評価する傾向にあるといえる。

(3) 聴取内容の言語化による感受の方法の検討

楽曲をどのように感じ取って言語表現しているのかを明らかにするために、自由記述の内容を、①形容詞や形容動詞を中心に記述しているもの、②イメージした具体的な情景を記述しているもの、③音楽の状況(流れや構造)を記述しているもの、④音楽的語彙を用いて音楽の諸要素を記述しているもの、⑤その他、⑥無記入、の6つに整理した上で、音楽経験あり群と音楽経験なし群でまとめた(図11)。

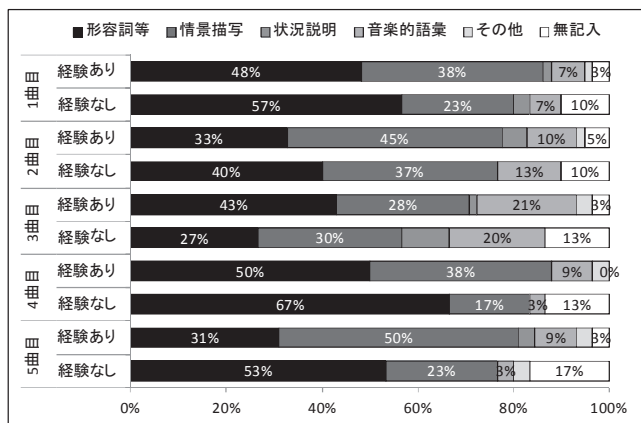


図11 音楽経験別記述内容の割合

まず、3曲目を除くすべての楽曲において、音楽経験あり群は「おだやかな空間の中で、蝶や鳥、はちが優雅に飛んでいる様子」(1曲目)、「宇宙人の宇宙船の集団が、地球めがけて一気に突っ込んでくる」(2曲目)、「いばらの中にぽつんと立つ古い小屋の中に若い娘がいて、外をながめながら来るはずのない者かなしげにずっとまっている」(4曲目)、「(動物が)大勢でえものを追いかけたり、にげたり、えさを食べたりする様子」(5曲目)のように具体的な情景描写をする割合が高かった。一方、音楽経験なし群は「落ち着いた」(1曲目)、「あわてている感じ」(2曲目)、「悲しいイメージ」(4曲目)、「明るく軽快」(5曲目)などのように簡単な形容詞等を単独で用いて記述する

割合が高かった。

次に、音楽的語彙を用いながら音楽の諸要素について記述している割合は両群に大きな差はみられなかった。特に3曲目は両群とも20%程度が該当し、「同じメロディー・リズムが何度もくり返されている」と記述した者が多くみられた。その他に、「スタッカートがたくさんついているような、かたく歯切れのよい音」、「長調と短調が混ざっていたので、焦っていららど何か楽しんでいる感じ」などのように、アーティキュレーションや調に関する記述がみられた。3曲目は形容詞等で曲想を表現しにくい音楽であったため、必然的に音楽的構造の記述や音楽的語彙による表現に至ったと思われる。他の楽曲では多くてもせいぜい10%程度であることから、全体的に音楽的語彙を用いた記述は少ない。学習指導要領の共通事項に示されているように音楽の諸要素を意識しながら言語活動へ展開するためには、普段の音楽学習において音楽的語彙の獲得とその応用について教授者側からの意識的な仕掛けが必要となろう。本調査の被験者はこの点について学習の深化がまだみられないと考えてよい。

さらに、音楽経験あり群よりも音楽経験なし群の方が無記入の割合が明らかに高かった。評価語を用いた印象評価には適切に回答していることから、聴取したもののから何らかを感じ取る力はある。しかし、イメージをふくらませたり、音楽の印象を自分なりの言葉で表現したりする能力は高くない。これらの能力は、学習や経験を通して獲得する能力であり、何もせずに放置しては獲得する機会を失ってしまう可能性がある。

このように、音楽の習い事などによって音楽の学習経験が多いほど、楽曲を聴取した際に豊かな想像力を働かせることができ、言語的表現の能力も高い傾向にあるといえる。ただし、音楽的経験の差に関わらず中学1年生の時点ではそれほど多くの音楽的語彙を獲得しておらず、音楽について話をしたり意思疎通を図ったりするための適切な指導や学習が必要と思われる。

音楽を聴取して感じたことやイメージしたことを言語化することには、もちろん言語表現能力が必要であるが、その能力は様々な階層からなり、単に形容詞等のみで表現するもの、オノマトペを用いて表現するもの、イメージをふくらませて具体的な状況を描写するもの、音楽的語彙を用いて分析的に述べるものなど多様である。この言語的表現の多様性は、すなわち聴取する者の聴き方や感じ方を少なからず反映している。したがって、聴取内容を言語化したテキストを分析することによって、先述した評価語を用いた印象評価からは明らかにできない側面(感受の方法)を補足的に

明らかにできると考えられる。

(伊藤 真)

5. おわりに

本研究では、14の評価語を含む単極評定法を用いた印象評価によって音楽を感受する能力を試行的に測定した。被験者の行った印象評価には矛盾がなく、また音楽経験の差によって印象評価が異なる結果を得たことから、この方法が音楽を感受する能力を適切に測定しうる事が確認された。また、感受の方法については自由記述の内容を補足することによって分析可能であることが示唆された。今後は評価語の妥当性を検討した上で、分析方法を確立する必要がある。

(伊藤 真)

引用(参考)文献

- 1) 三村真弓, 光田龍太郎, 松前良昌, 桑田一也, 吉富功修, 高旗健次, 藤井恵子「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(3)―中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目して―」『学部・附属学校共同研究紀要』第38号, 2010, pp.167-172。
- 2) 三村真弓, 伊藤真, 泉谷正則, 桑田一也, 原寛暁, 増井知世子, 松前良昌, 光田龍太郎, 藤井恵子「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究(1)―聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして―」『学部・附属学校共同研究紀要』第39号, 2011, pp.153-158。
- 3) Hevner, K. (1936) Experimental studies of the elements of expression in music. *American Journal of Psychology*, 48, pp.246-248. etc.
- 4) 安達太郎, 岩宮眞一郎(2003)「色彩と音楽とが互いに及ぼす影響〜ショパンのエチュードを手がかりに」『日本音響学会九州支部 第5回講演論文集』pp.13-16。
http://www.hicc.cs.kumamoto-u.ac.jp/others/asj-kyushu/student/05/Adachi_4.pdf (2011.10.8参照)
- 5) 亀井且有, 青山美由夏, 木下雄一郎, クーパー・エリック, 星野孝総(2006)「SD法による心理計測および近赤外分光法による生理計測にもとづく打楽器音楽の感性評価」『日本感性工学会研究論文集』Vol.6, No.4, pp.67-76。
- 6) 谷口高士(1998)『音楽と感情』北大路書房, pp.68-88。
- 7) 中井未生, 三石大(2004)「楽曲フレーズに対する印象評価の個人差の分析」『教育情報学研究』第2号, pp.111-118。
- 8) 前掲書6), pp.71-72。
- 9) 井上正明, 小林利宣(1985)「日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観」『教育心理学研究』33(3), pp.253-260。
- 10) 前掲書7)。